→「島津の退き口」と『冥途の飛脚』の結末を歩く
2020.6.14（日）カルチャーウォーキング
関西文学散歩 第 556 回(ＪＲ558 回）参加報告

大神神社(おおみわじんじゃ)に参拝し、昼食を済ませて午後のコースへと向かう。その道沿いに、三輪茶屋の旅籠門だったという「そうめん屋」の前を通る。その話が事実なら、立派な旅籠だ。そして、道を進むと若宮社が道の突き当りにある。ここは大直禰子(おおたのたねこ)神社であり、もう一つの神宮寺だった大御輪寺の跡だと、田中先生から話を聞いた。倭姫伊勢巡行の起源にもなったこの神社をはじめ、周辺の社殿はすべて大神神社の摂社、また末社であるという。そんな摂社の一つ、久延彦神社が若宮社東側の「大美和の杜」の丘の上にある。石段を上っていくと拝殿の前が展望所になっていて、大和三山が望めるというが、畝傍山・耳成山は見えるが、天香久山は木立が邪魔をして見えなかった。丘上の展望所に行く道沿いに＜ささゆりの群落＞があり、丘を下りると狭井神社だ。参道脇に三島由紀夫の「清明」の文字を彫った石碑があった。

弁天社古墳

山の辺の道は、大神神社を横断していて古道から西へ、箸墓方面へと左折すると、やはり大神神社の末社、富士神社と厳島神社がある。その小さな祠を包み込むように「弁天社古墳」が覆っている。円墳のようだが、封土が失われており、玄室が露出しているので、横穴式石室を見てみようと、凝灰岩の岩山に上ってみる人がいた。この小さな古墳を初めとして、周辺には大小さまざまな古墳が目白し、この日は茅原大墓古墳、慶運寺裏古墳、ホケノ山古墳を見学する筈だったが、ホケノ山は「マムシ注意」の看板が立っていたので遠慮をした。慶運寺裏古墳は、ご本堂の裏に横穴式石室の円墳が存在しており、石棺の身の石は珍しい阿蘇のピンク石というそうで、阿弥陀如来が彫られてる。解散駅のＪＲ巻向駅の向こう側には、あの「卑弥呼」の墓ではないかと考えられている箸墓古墳もあるが、もう足が棒のようだし、いささかタイムアウトである。最後に、帰り道の道沿いに「柿本人麻呂公屋敷跡」があったので、そこで解散となった。

弁天社古墳に上る

柿本人麻呂公屋敷跡

＜報告：石井慎二＞